宇部日報　2024年〈令和6年〉　7月10日 水曜日

「ほっとやまはく」タイム㊽

キワ・ラ・ビーチの大石が語る歴史

海水浴客でにぎわう宇部市東岐波月崎のキワ・ラ・ビーチ。干潮時には幅2キロ、奥行き700㍍の日本有数の広大な砂洲が姿を現します。

山口湾に面する月崎には、縄文時代の集落である月崎遺跡、古墳時代から古代にかけて塩作りを行った波雁ケ浜（はかりがはま）遺跡、古墳時代の塩作り集団に関わる首長墓である若宮古墳群や月崎古墳などがあり、数千年前から魚や塩など豊かな海の資源を基盤とした生活が営まれてきたことがうかがえます。

ある日、キワ・ラ・ビーチの景色を楽しみに散策していたところ、砂浜には似つかわしくない大きな石が目に入ってきました。その瞬間、あっと声を上げて驚きました。砂浜に転がっていた大きな石に、幾つもの穴が開けられていたからです。

この穴は、石を割る際に用いる「矢」を打ち込むための矢穴と呼ばれるものです。矢によって石を割って切り取る「矢穴技法」は世界共通の画期的な技術でした。紀元前からエジプトや中国ではこの矢穴技法によって大きな石が切り出され、ピラミッドや巨大な建造物に用いられてきたのです。

矢穴技法が日本に定着したきっかけは、鎌倉時代における奈良東大寺の大仏再建でした。1180（治承4）年、平家によって大仏が焼かれてしまいます。東大寺再興の総合プロデューサーとなった重源は、その費用として周防国からの税を使うことを許されました。また、徳地の山中に入って巨木を切り倒し、佐波川から奈良へと材木を送り出しています。さらに、中国に3回も渡った経験を持つ重源は、中国から技術者を呼び寄せました。このとき招かれた中国の石工によって矢穴技術がもたらされ、日本でも普及していったのです。現在も東大寺南大門の階段や基礎になっている石には、約800年前の矢穴の痕が残されています。

さて、キワ・ラ・ビーチの石は、ピンクがかった花崗岩で表面は波に洗われてやや丸く、矢穴が一直線に並んで開けられています。矢穴の大きさは、おおよそ縦4センチ、横6センチ、深さ5センチの箱型で、江戸時代後期以降のものです。海岸で石を割り、そのまま船に載せて、目的地まで運んだのでしょう。

江戸時代の山口湾周辺には、秋穂岩屋の市宝家（いっぽうけ）をはじめとした多くの石工がいました。彼らは神社の鳥居、こま犬、灯籠などのほか、長州藩の推進した名田島新開作などの土木工事を引き受けていました。山口湾の波打ち際に残された大石は、長州藩土木事業の歴史を物語る遺産なのです。

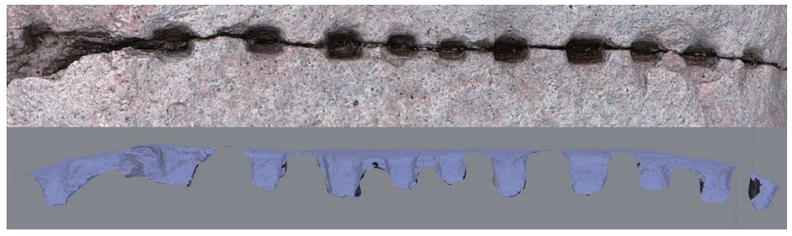
阿部来（考古担当学芸員）

▽次回は24日です。

キワ・ラ・ビーチの大石

キワ・ラ・ビーチから見た月崎岬

月崎岬の石切場跡



上から見た矢穴（上段）、矢穴の横断面3次元モデル（下段）

東大寺南大門

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。